これからの猪猟〈18回〉

田宮　治

ここまでの記述を前提に、本誌五月号でお約束した「この犬芸がこんな猪猟をやる」という究極の猪止め犬芸をこれから発信していきたい。少しでも参考になれば幸いである。

強烈な噛み止め犬芸

昨猟期は、山梨の猟友の松土氏や長野の篠原氏、さらに山彦会千葉支部長の平野氏までが体調を崩され、共猟できない中で、愛犬たちだけを頼りに単独猟を実践してきた。それでも思いどおりの楽しい猪猟ができた。愛犬たちの犬芸も驚くほど成長し、猪もどんどん獲れた。

「この山ではここで猪を起こし、あの辺りでがっちり止め、二、三㍍くらいの所から猪を止め撃ったのだ」と、一人で予想しての実践となった。

犬芸さえ完成していれば、猪猟のどんな場面でも焦ることはない。犬たちの動きを確認しながら、ゆっくりゆっくりと楽な峰筋を歩き、犬たちが鳴き出したら、上から飛び下りて猪止め現場に駆けつけるという態勢で狩り進むのが肝心なのだ。

そうすれば実戦慣れした犬たちは必ず主人の気持ちを理解し、思いどおりの実戦をしてくれる。

平成二十五年十二月七日の大一番は、まさに犬芸を信じていればこそ実現できた強烈な噛み止め戦であった。

私はこの日の戦いに一人で臨むため、千葉の猟場でキャンプ場のある入り口にジープを止めたのが十一時だった。

二、三人でやっていたら、一戦が終わり早めの昼食をとる頃だが、今回は時間に縛られることない一人猟だったので、車で猟場の山裾を入念に見切りしてきた。だから、猪の寝屋までほぼ見当がついていた。

ここのキャンプ場は、山城の跡地だったことから、猪が入っていたとしても並の犬での単独猟ではまず獲れない。仮に獲れたとしても猪の引き出しが極めて困難な所である。

この猟場は一本の大峰が中央に横たわり、その周囲を大きく車道が通っている。車を止めているキャンプ場の入り口は、大峰の頂上に位置している。そこからキャンプ場を通って大峰筋の小道を二十分くらい行くと、七曲がりの坂上の道に到着できる。

一見すると比較的簡単な猟場であるように思える。大峰の右側は大杉林と真竹の藪の小沢が四、五本、山裾の車道まで下りているだけなので登れない崖は少ない。ただし、左側は昔の城跡だけに、キャンプ場の中心にある山頂の神社の裏の展望台の下辺りからは上り下りできない断崖となっている。

その山裾は、濠跡の田荒らしの湿地帯が広々と続いている。この断崖とぬかるみの田荒らし地帯が猪を守っているので、両隣の山々を狩り攻めると猪は必ずこの城跡に逃げ込む。だから、その猪を迂闊に追って断崖や田荒らし地帯に嵌まると、身動きできない大変な事態になる所でもある。

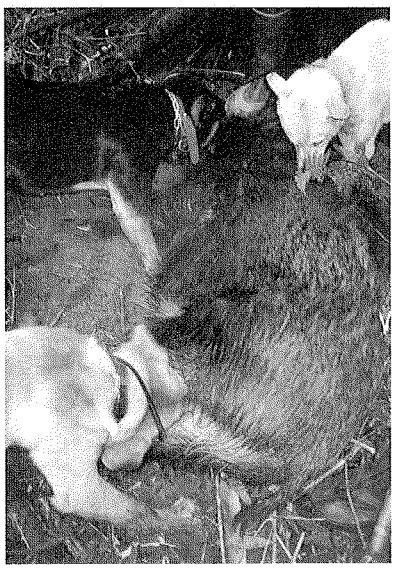
そんな難猟場と知りながらもこの猟場に来たのは、周りの猟場で猪を獲り過ぎたため、めっきり猪が少なくなったことと、今朝、見切った猪跡がこの大峰に登っていたからである。

私は経験上、この猪跡を見て一

〇〇キロくらいの猛猪であると判断した。この猪がいつもの渡りを通ってあの小沢を登ったのだから、向かった先はこれから狩り攻めようとしている大峰筋を越えた左側の真竹藪に違いないと思った。

猛猪があの真竹の大藪にいつもどおりに潜んでいるのであれば、単独で撃ち獲るには厄介な場所である。

当然、犬たちは大峰筋の小道から下の真竹藪に向かって攻め込むことになるが、よほど猪止め芸に優れた犬でないと、猪は真下に飛び下り、山裾に広がる小川沿いの田荒らしを突き抜け、向かいの大山続きに逃げ延びるだろう。そうなれば、その先にタツを張って、撃ち獲らない限り万事休すだ。



最高の猟芸で噛み止めた現場。並の訓練ではここまでできない

三年ほど前、本誌で発信した心に残る一戦では、当時の山彦会千葉支部長だった北嶋氏が、マロ号、ヨシ号、シロ号の素晴らしい噛み止め芸によって撃ち獲った、まさにあの時と同じ真竹藪の場所である。

この場所できっちりと噛み止め、動けなくなっている一三〇キロの大猪を大峰筋から真下に寄り付き、五メートルくらいから見事に一発で仕留めたのだ。

当然、あの時はグループ猟で、いかにして噛み止め、猪を撃ち獲るかを実践する訓練中だったので、私の後に二人を連れて狩り進み、犬たちの立て鳴きに対応して瞬時に三方向に走って移動タツを張る作戦だった。

私は猪止め現場を五〇メートルほど通過して、その先から下りている小峰伝いに飛び下り、猪止め現場の真下にある小沢口に大きく回り込み、飛び下りて来る猪を迎え撃つ態勢をとっていた。

そして、加藤君は大峰筋から下りている一本手前の小峰伝いに駆け下り、北嶋氏と同時に猪止め現場に寄り付き、北嶋氏を見守っていた。

さらに、現在の山彦会千葉支部長である平野氏には、大峰右側の小沢、つまり今朝見切った所で、猪が登った小沢に念のため戻り、タツを張る四人（小グループ）の包囲網のもとで、この難猟場を見事に攻略したのである。

その後も、このグループで何度もこの猟場近くの山々に潜んでいる主的存在の大猪を何頭も撃ち獲っている。

この勝手知ったる難猟場であったが、今回、私にとって一人で愛犬たちの実力を検証しながら、闘志を剝き出して挑戦できる絶好の猟場だった。

大一番

いよいよ猪猟の真価が問われる時だ。私は万全の作戦を立て、この猟場が最悪の条件であることと、狙っている猪が一筋縄ではいかない歴戦の猛猪（つわもの）であることから、この一戦の決着は猪犬次第であると考えた。

一人で実践するこの大一番は、あくまでも完勝することを最優先に考え、強烈な噛み止め芸が身上のブイ号、カツ号、武蔵号の三頭が出番となった。

この三頭ならどんな悪条件でも、猪を寝屋で止め置くか、猪が飛び出して逃げたとしても絶対に逃がすはずがない。猪に食い下がり、三頭一団となっての直線的な谷落としで、山裾までの間に猪を噛み止めるはずである。

噛み止め芸の凄さを知り尽くした私が寄り付いて近くから狙い撃つのだから、納得のいく結果が出て当たり前である。

「さあ、行くぞ！」と三頭に声

をかけながら順次放犬するが、車に残してきたヨシ号、シロ号、マロ号は「俺たちの出番だろ」とワンワン鳴いて催促している。

「よしよし、お前たちはここで待て、必ず獲って来るからな」と言い残して、車から喜々として狩り行く武蔵号たち三頭をゆっくりゆっくりと追い始めた。

キャンプ場に通じる小道は大杉林の小峰をV字形に切り通した小さな峠道になっており、その右上の栗林には箱罠が仕掛けられている。この峠道は猪がいつも掘り荒らす所で、見切るには都合の良い場所でもある。山々の紅葉は既に終わり、すこぶる見通しが良い。

切り通しの小道を登って峠を下り始めると、新しい猪の掘り跡が道の至る所にあり、よく見ると今朝見切った猪の足跡だった。

「あの猪はここまで来ていたのか」と、私は想定外の猪の行動に驚いた。とりあえず犬たちの動きを見て、この猪の行動を判断することにした。

犬たちはこの行動をすべてお見通しのようで、すぐ下の栗林の中を三頭で一回りすると、キャンプ場を突き抜けて大峰筋の右下に広がる孟宗竹（モウソウチク）の小沢に飛び下りて行った。

この犬たちなら見切りなど必要ない。猪はこの場に戻ってこの大峰に潜んでいるに違いない。もしかすると、犬たちが飛び下りた孟宗竹の小沢かもしれない。そうだとすれば、犬たちの狩り込んでいる小沢なら、安全で攻めやすく、さらに、山裾にはすぐ舗装道路まであるので、逆に有利である。

以前もこの小沢に猪が寝ていたことがあった。その時は大藪がなく空いた明るい場所だったので、猪は早立ちして大杉林の中へと逃げて行った。

大峰筋の小道をGPSで犬たちの動きを見ながら、犬たちを真下に置くよう歩調を合せて突き進んだ。あの大沢で猪を起こせば猪は必ずこの下を通るか小峰伝いにここに登ってくるだろうと思い、大峰筋にある小峰の山頂に立った。

ここは山頂というより、篠竹藪から五㍍くらい盛り上がった見晴らし良い場所で、猪のタツ場の要所である。

犬たちは大藪を何事もなかったかように狩り、今朝見切った時に猪が登った真竹の小沢をしきりに探し回っている。そして、猪の入り跡（寝屋入り足跡）に乗り、私の立っている小峰の頂上に向かって来ている。

百戦錬磨のこの犬たちでも、猛猪の寝屋入り前の驚くべき体臭消しのトリックには少し手間取っていたが、さすが嚙み止めの名犬である。確実に見破っている。

放犬後十分、大峰筋を移動すること四〇〇㍍の所で、猪が寝ているのは大峰筋を越えた反対側に広がる真竹の大藪だと認定したようだ。

犬たちの狩り込みから、この曲者（くせもの）（猪）は、最初に考えていたとおり大峰下に広がる真竹藪に潜んでいると改めて確信できた。

頂上からは激戦の場となる遠くの山々や、峰や谷まではっきり見渡せる。まさに絶景そのものである。無風で晴れ渡った絶好の決戦日和であるが、間違っても猪を大山まで逃がしてはならない。

大峰が続く所まで逃げ込まれたら、その先にタツを張らない限り一人猟では到底勝ち目はない。

そんなことを思っていると、ブイ号がひょっこり目の前に現れ「ジジ、ここにいたのかよ」と駆け寄って来た。続いてカツ号、武蔵号も「この下にはいなかったよ」と言いたげに尻尾を目いっぱい振っている。「よしよし、来い来い！」と呼び寄せ、おもむろに頭を撫でてやった。

ブイ号たちは既に猪の寝屋を認定したようで、私の手を振り払い今にも飛び出す勢いである。そして、一頭一頭の名前を呼び全身を撫でてやるが、犬たちはもう戦闘態勢に突入である。目の前の真竹藪を目がけて崖下に飛び下りて行った。

「猛猪だから無理するなよ」と祈る気持ちで見送ったが、猪犬である以上、常に危険は付き物であり、この勇姿が今生の別れとなるかもしれない。犬たちの実力をいくら信じていても、不安や疑念は頭をよぎる。

その時である。ブイ号、カツ

号、武蔵号の素晴らしい絡み鳴きが始まった。三頭が同時に寝屋を急襲し猪を噛み止めたようで、ワンワン、ギャンギャン、グォーッグォーッ、グォーッ！と、崖下の真竹藪は大騒ぎである。この頂きから犬たちが突入してわずか三分ほどなのに目の前の崖下から熾烈な戦いの攻防音が山々に反響して、興奮の坩堝（るつぼ）と化している。

「よしよし、その調子だ。その場に止めていろよ」と、私が立っている所から現場の状況をよく確認すると、止め現場の真上五〇メートルくらいの願ってもない好位置だが、飛び下りるには崖で無理である。

GPSを見ながら、大峰筋の小道を先回りして、田荒らしまで続いている小峰伝いに大急ぎで駆け下りた。この小峰はこれまで何度も上り下りしているが、かなり急坂で滑りやすい杉林の峰である。

猪止め現場は、その小峰の左側の真竹藪で、大杉林の中を小沢が山裾まで下っている所である。その小峰を飛び下りて猪止め現場が見える杉の大木の根元に立って周囲の状況を確認すると、急斜面で真竹と雑木に蔓草までが密生する大藪である。

そこでワンワン、ギャンギャンやっているが、グォーッグォーッ、グゥーッグゥーッと反撃している。オス猪のようだ。まだまだ元気でバリン、バリバリ、ドッドッと枯れ竹をへし折り地響きを立てて大暴れしている。

犬たちはどんな激戦でも慣れたもので、猪との間を十分とって三方から挟み込む態勢で渡り合っている。猛猪に対する止め芸はこの方法が一番ケガがなく、長時間止められる最高の芸である。

しばらく様子を見ているが、猪は全く動こうとしない。無理に寄り付く気になれば撃てないことはないが、この急斜面の大藪に立ち入ると動きがとれない上、猪の姿も見えない。

私は止め現場の上に回って、この猪を山裾の大杉林まで追い落とし勝負して撃ち獲る作戦に出た。

以前にも、この大藪で大猪をヨシ号、シロ号、マロ号の三頭で止め切り、北嶋氏が撃ち獲ったことがあった。この場所で撃ち獲ると、山裾まで続く真竹の大藪を引き出すことになり、道路まで田荒らしを通っても一キロ以上あるので、運び出すのが大変なことになる。だから、一人ではとても無理なのである。

北嶋氏が撃ち獲った時は、平野氏と加藤氏も一緒だったので、四人でロープを使い、急斜面の小峰伝いに上まで引き上げ大峰筋の小道に出て、そこから反対側の七曲りの道に運び出した。だから、ここでは猪を山裾の小川まで追い落とす以外にないのだ。そうすれば、止め現場で猪を撃ち獲っても一人で小川の水流を利用してどうにか道まで運び出せるだろう。

単独猪止め犬猟の基本は、犬たちの止めた猪に万難を排して一刻も早く寄り付くことが勝負を決めるポイントとなる。この勝機を猪の引き出しの理由だけで追い落とし、先送りするのだから、この作戦はよほどの腕自慢の猟人と猪止め芸に秀でた名犬でなければ絶対にやってはならない戦法である。

この戦法で無理して止め猪の追い落としとなれば、せっかく犬たちが作ってくれた絶好のチャンスを猪もろとも追い落とすことになり、わざわざ「逃げてください」と逃げ道を与えるとんでもない邪道になる。

邪道と分かっていながらも、山梨の大山やこの猪止め現場のように、猪の引き出しが困難な猟場に立った時、「そら、もうひと押しだ。あと五〇メートル追い落とせ！」などと、思わず犬たちに檄を飛ばしている。それは単独猟の泣きどころである地獄の引き出しを少しでも楽して安全にやりたい一念からである。

杉の大木の根元でしばし様子を見守っている私に「ジジ、早く来いよ」と犬たちはますます元気でワンワン、ギャンギャンと攻めまくっている。「よし、それじゃあ行くぞ」と大声で「ジシが来たぞ！　いま行くからな」と、突撃合図を犬たちに送る。

そして、崖の下にある一本の獣道（猪道）に乗って、そろりそろりと注意しながら猪止め現場の真上に立った。

（つづく）